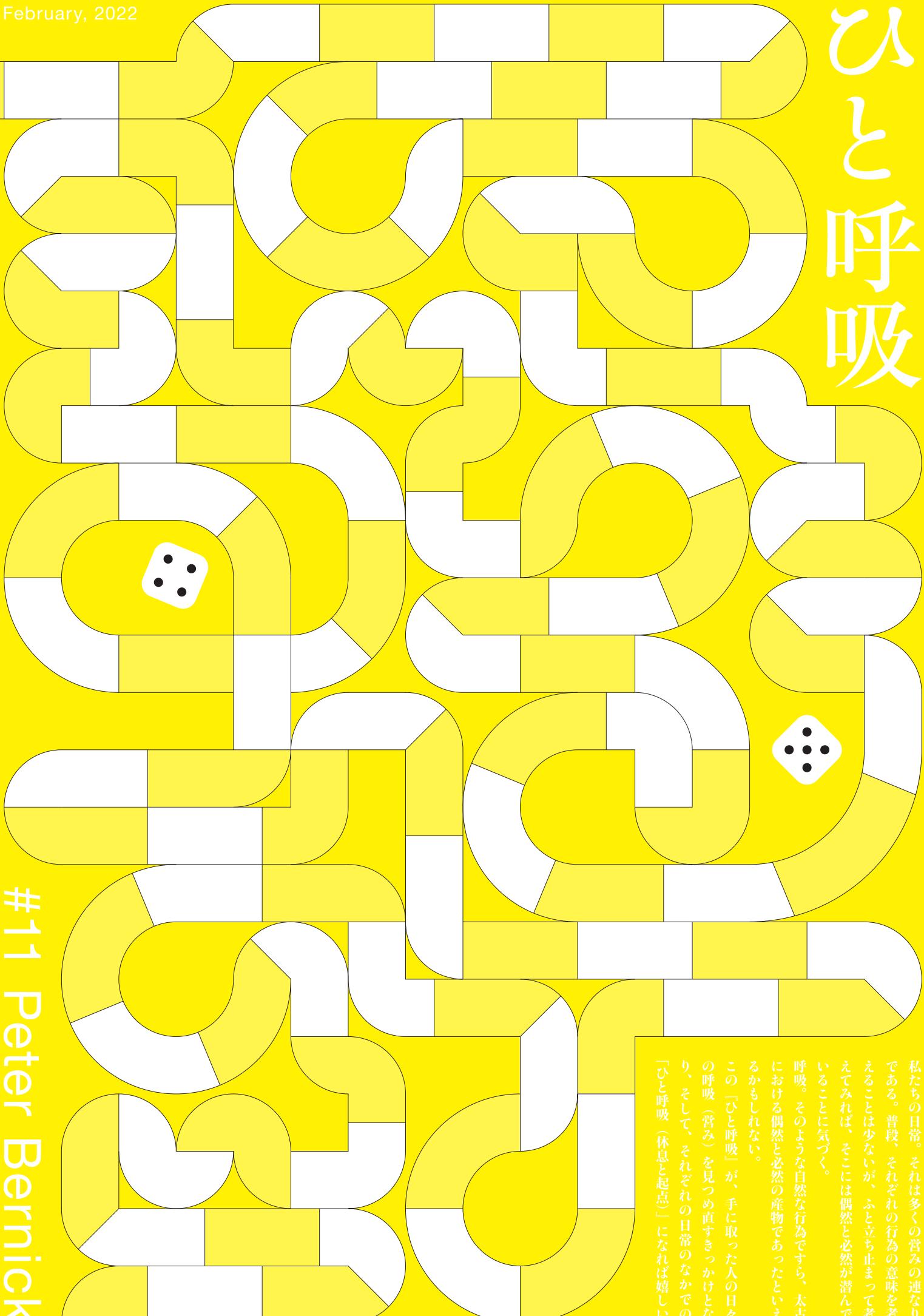


ひと呼吸

私たちの日常。それは多くの営みの連なりである。普段、それぞれの行為の意味を考えることは少ないが、ふと立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必然が潜んでいることに気づく。

この『ひと呼吸』が、手に取った人の日々の呼吸（營み）を見つめ直すきっかけとなり、そして、それぞれの日常のなかでの「ひと呼吸（休息と起立）」になれば嬉しい。



#11 Peter Bernick

Interviewer Murata Jun / Text Kitani Megumi

世界へ飛び出す

村田 本当は質問から入るところなんですが、まずはお会いできて嬉しいですという感想から。この間、どこの大学もコロナによって大変な状況でした。それなのに直接会って、大変ですねと言う機会もなくて。バーニックさんとも直接会うのはずいぶん久しぶりです。

この間、どのように過ごされましたか。バーニック 2020年の春に支援室の人の入れ替わりが相次いで、バタバタと落ち着きませんでした。ちょうどそこにコロナがやつて来て、おまけに家族の事情で一度ハワイに帰る必要もあつたりして。でもその間も日々リモートで支援室とやりとりして、新しいスタッフのサポートもあるし、オンライン疲れみたいなもの出てきて大変でした。でもなんとか乗りきつて、日本に戻つて来れた。

村田 通常の業務だけでも大変なのに、そこにはいろいろ重なつてしまつたんですね。今の現場の話もお聞きしていきたんですが、まずはバーニックさんがどんなバックグラウンドをお持ちで今ここにいるのかということ

からお聞きしたいと思います。実は全然ちゃんと知らないくて。

バーニック なかなか膨大なので、大丈夫ですか（笑）。

村田 はい、ぜひとも。

バーニック まず生まれは、アメリカのオレゴンという西海岸の州です。母親はハワイ出身で、オレゴンの大学に通っていたんですね。そこで僕が生まれたんですが、2歳の時にハワイに戻つたので、育ちはハワイです。

それから僕もオレゴンの大学に進学しました。当時の僕は考え方方がすごく偏っていて、完璧にできないことが許せない。もう0か100しかないみたいな感じでした。今はだいぶ改善されて、1か99でも許せるようになります。したけど（笑）。

そんなことで大学時代にちょっとやり過ぎてしまい、バーンアウトしてしまいます。いつたんハワイに戻ることになつて、ラナイ島のパイナップル畑で働いたりして、もう一度ハワイ大学に入り直しました。ところがまた学費を稼ぐためのアルバイトを一生懸命やりすぎて、途中でパンクしてしまいます。頑張つて働くのだからマネージャーに評価され、もう少し働いてくれないかつて頼まれるんですけど、ノーとは言えな性格で、授業もたくさん取つているのに週3時間ぐらい働くようになつてしまします。それでも、生きるか死ぬかみたいなところまで追い詰められて逃げるしかないつて。それで手続きも何もせずに全てを放棄して、ア

メリカ本土へ渡ります。自転車を持ってアメリカ西海岸に着いたら、テントと寝袋だけ買つてひたすら東へ向かつて自転車をこぎ出しました。

アメリカ横断からシベリア鉄道、そして日本へ

村田 冒頭からスケールが大きいですね。それは20代前半ぐらいですか？

バーニック まだ18歳でした。高校をちょっと早めに卒業していました。

自転車をこぎ出したものの、所持金が300ドルくらいしかない。途中、テキサス州で百科事典の訪問販売をやつたり、ミネソタ州でコツクしながら旅を続けました。

ようやく東海岸のニューヨークにたどり着いた時、アメリカ横断なんて大したことないんじゃないかな、世界一周しないと意味がないんじゃないかなって、完璧主義からくる変な考えが浮かんできて、本で読んでいつか行きたいと思っていたシベリア鉄道を目指すことにしました。

村田 いいですね、僕も憧れています。バーニック シベリア鉄道に乗るまでも、イギリスやスコットランド、アイルランド、フランスやベルギーにも行きました。キャンプしながら昔の知り合いや親戚を訪ねてまわり、アイルランドでは知人の家に数週間居候して、食べるためのお金を稼いだらまた移動といった感じでした。途中、宣教師に拾われてお金を恵んでもらつたり、他にもいろいろ大切な出会いがあつたんだけど、とにかくなんとかヘルシンキにたどり着きます。

ようやくシベリア鉄道に乗つて、一週間かけてナホトカに着いて、そこから船で横浜に入つたのが、初めての日本でした。

村田 まさに一周まわつて。バーニック そう、もつと早い道はあつたん

世界へ飛び出す
（1984年10月）

八丈島で日本を知る

いる外国人という枠にうまくはまつたのがわかりやすく良かつたのかもしれない。

バーニック 英語を教えるながら日本に3年程滞在したので、23歳になつていきました。また自転車で東南アジアかオーストラリアを一周したいたなとも考えていたんですけど、そろそろ大学も卒業しておいた方がいいかと思つて、結局ハワイの大学に戻ることにしました。

村田 そこでは何を専攻されるんですか。

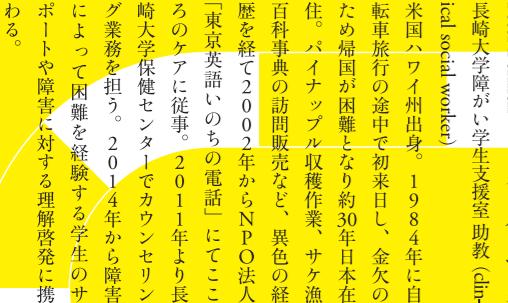
バーニック もともとジャーナリズムを専攻していたんですけど、日本での滞在経験がなかったり、日本でアジア学を専攻することにしました。そして今度はやつと卒業することになりました。

村田 ひとつ区切りがついた。そこでもまた次の選択肢が出てくるんですね。

バーニック そう。日本にいた時から言語が好きだなっていうのがわかつていて、もうちょっと勉強したいと思っていました。在学中に日米学生会議に参加した経験もあって、できれば働きながら日本語を使いたいなつて。それでJETプログラムというのに応募して採用されます。配属先希望を聞かれたので、滞在したことのある東京以外つて答えたんですけど、配属先は東京でした。でも、東京は東京でも八丈島。元々ハワイ出身なので、島は大歓迎です。

村田 八丈島ですか。

バーニック それが1991年で、初代の八丈島国際交流員として町役場に赴任します。役場側も受け入れ経験がないので、僕をどう扱えばいいのかわからない。だから何をするにも自分で考へないといけなくて、例えば八丈町に何か物が必要な時は東京都庁に陳情



Peter Bernick
コーチャーバーニック
長崎大学障がい学生支援室助教 (Clinical social worker)
米国、ワシントン州出身。1984年に自転車旅行の途中で初来日し、金欠のため帰国が困難となり約30年日本在住。バイナップル収穫作業、サケ漁、百科事典の訪問販売など、異色の経歴を経て2002年からNPO法人ボートや障害に対する理解啓発に携わる。ルールというか、桦というのか。日本に

のケアに従事。2011年より長崎大学保健センターでカウンセリング業務を担う。2014年から障害によって困難を経験する学生のサポートや障害に対する理解啓発に携わる。

世界へ飛び出す
（1984年10月）

最初、求人広告で見つけた英会話教室で働くことになります。英語を教えるかわりに四畳半の部屋を間借りできるっていう、僕にとつてはうつてつけの条件でした。でもやっぱりお金はなかつたので、パン屋でパンの耳をタダ同然でわけてもらつて、それにピーナッツバターをぬつて空腹をしのぎ、夜は寒い部屋で寝袋の中で本を読んで過ごしました。

そういうしているうちに新しい英語学校で働くようになり、早朝レッスンをたくさん受け持つことで徐々に人並みのお給料をもらえるようになります。そしてせつかく日本に住んでいるのだから、その土地への敬意というわけでもないですが、日本の言葉を喋りたいと思って、昼間は聖ヨゼフ日本語学院に通つて日本語を勉強して、午後からは英語学校で英語を教えるという生活が3年程続きます。

村田 いろんな国をまわってきたバーニックさんが日本に留まって、語学までやろうと思つたきっかけで何かあつたんですか。日本も「途中」であつても良かつたわけですね。

バーニック 理由はいくつかあつて、直接の理由としては、それまでシベリア鉄道ついう目標があつたけど、シベリア鉄道の先にはもう日本しかなくて、日本に着いたらお金がなかつた、で、それ以上どこに行けなかつたというのがあります。

それから、初めて日本に来た時からあまり違和感がなかつたというのもある。それは住んでいたハワイにアジア系の人たちがたくさんいたからだと思います。

あと、当時の僕はルールが好きだったんですね。ルールというか、桦というのか。日本に

世界へ飛び出す
（1984年10月）

いのちの電話相談員を経て専門的に学び始める

村田 その計画は実行されるんですか。

Editor's Note

人に会うということを貴重に感じる日々が続いています。そのような不安定な社会状況の束の間に長崎へ足を運びました。久しぶりにリアルな対面で会話するバーニックさん。この間もオンラインではそれなりに話す機会がありました。それでも「再会」という言葉が頭をよぎるのは自然な反応だと思いました。

知らないことを探して、新しいことをやり始めてみる。ただ、その過程では新たな人の出会いや予期せぬ出来事に触れて、気がつけば共感したり、尊重したりする感情も芽生えてくる。バーニックさんのさまざまなエピソードは、先入観や固定概念がいかにもったいないものなのかを教えてくれたような気がします。

「普通」とは、しばしば多数派であることを表現するときに用いられる言葉であるように思います。ただ、自分が見えていないだけで（見ようとしていないだけで）、案外そうでもないのかもしれない。さまざまな文化や価値観があること、この面白さはたくさんの出会いで気づかされるものではないでしょうか。

紙面には十分に反映できないほど、バーニックさんの細かな経緯にはもっとたくさん出会いが潜んでいました。私も縁があってバーニックさんと出会うことができました。バーニックさんの人生の隅っこにでも、私を加えていただけると嬉しいなと、取材後、長崎の港と一緒に歩いていた時に思いました。

（村田淳）

Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積されてきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えいく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながると考え、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会

村田淳（京都大学）

船越高樹（国立高専機構本部）

宮谷祐史（京都大学）

木谷恵（フリーランス）

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援センター内

Web <https://www.gssc.kyoto-u.ac.jp/platform/>

Mail heap@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707